

そのときは彼によろしく

2007(平成19)年4月24日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督＝平川雄一郎／原作＝市川拓司『そのときは彼によろしく』(小学館刊)／出演＝長澤まさみ／山田孝之／塚本高史／国仲涼子／北川景子／黄川田将也／小日向文世／和久井映見(東宝配給／2007年日本映画／114分)

第2章

禁じられるほど燃え上がる？

……幼なじみの女1人男2人の友情をテーマとした映画が、最近はやり……？ 聖三角形またはプリズム、そして難病と交通事故、これらのキーワードは、友情を軸とした泣かせのストーリーづくりに不可欠……？ 「あの映画」「この映画」との共通点を比較・対照しながら観るのも一興だが、長澤まさみの十代最後の映画として、彼女の成長ぶりをしっかりと……。

 物語のキーワードは「プリズム」、したがって、主題歌も『プリズム』

誰でも小学生の頃、「プリズム」とは何かについて学んだはず。プリズムとは、フリー百科事典『ウィキペディア』によれば、「光を分散・屈折・全反射・複屈折させるための周囲の空間とは屈折率の異なるガラス、水晶などの透明な媒質でできた多面体」と定義されている。そして、それは双眼鏡をバラしてみれば入っているらしい。したがって、そのプリズムをこの映画のヒロイン滝川花梨(長澤まさみ)のようにネックレスの飾りモノにできることを、この映画を観てはじめて教わることに……。壊れモノの双眼鏡があれば、是非やってみたいもの。

この映画の大切な小道具となり、物語展開上のキーワードになるのは、このプリズム。したがって、余分ながら試写室でもらったプレスシートも何とプリズム、すなわち正三角形に折り畳まれているという凝りよう……。

花梨がプリズムの光に魅せられ、『きらきら星』を1人歌っているのは一体なぜ……？ それは、花梨が両親のいない寂しさを心の中に秘めていたから……？ また、自分をわが子のようにかわいがってくれる遠山智史(山田孝之)の父親、

悟朗（小日向文世）や母親、律子（和久井映見）に、ホントの両親のような愛情を感じていたから……？ さらに、さまざまに光るその光の中に、不器用ながら深いしっかりとした智史の愛情を感じていたから……？

そんなプリズムに象徴される花梨の想いを歌詞にしたのは、柴咲コウ。そして、主題歌『プリズム』を歌っているのも柴咲コウ。若者たちがこの映画を観て感動するのもいいが、是非この歌詞を読み、その意味するものや、そこに託されているプリズムの想いをしっかりと味わってもらいたいもの……。

女の気持に鈍感な男はソン or トク……？

『天国は待ってくれる』（07年）の主人公、西岡宏樹もそうだったが、この『そのときは彼によろしく』の主人公智史も女の気持に鈍感な男のよう……？ そもそも、いくら13年間会っていないからといって、少女時代も美しく、したがって13年後の今も美しく成長した花梨の姿を見て気づかないというのは、あまりにもひどすぎる。というより、小説や映画の設定としては許されても、現実にはありえない話……？

そんな智史だから、毎日のように通っているベーカリーショップの店員柴田美咲（国仲涼子）から好意をもたれていることにも全く気づかないのも当然……。智史の店で働くことになった花梨は、美咲と智史の会話を1度聞いただけで、美咲の智史に対する想いを理解したくらいだから、智史の鈍感ぶりは相当なもの……？ しかし、そこがかえって女性には魅力的に思える面も……？ したがって、あまりに女の気持がわかりすぎる男はかえってソン……？ そう考えると、女の気持に鈍感な男は意外にトク……？

聖三角形 vs. プリズム……

『天国は待ってくれる』の原作は、岡田恵和の『天国は待ってくれる』。そして『そのときは彼によろしく』の原作は、市川拓司の『そのときは彼によろしく』。いずれも今風の「泣かせドラマ」だが、互いにヒントを出し合ったのではないかと思うほど、両者の共通点は非常に多い。

何よりも、登場人物が、女1人男2人の3人グループという設定と、この3人

の強い友情が物語の基礎になっている点が全く同じ。そして、3人の友情を特徴づけるキーワードが、『天国は待ってくれる』は聖三角形、そして『そのときは彼によろしく』はプリズム。また、悲劇的展開にしていくためのスパイスは病気と交通事故というのが定番だが、それはこの両作品とも共通。しかして、『天国は待ってくれる』の出来と、この『そのときは彼によろしく』の出来比べは……？

秘密基地構想は『同じ月を見ている』とソックリ……？

女1人男2人という3人グループの友情物語は、土田世紀原作の『同じ月を見ている』を原作とした『同じ月を見ている』(05年)も全く同じ。そのうえ、男2人のうち1人が画家になるという設定や、3人の友情の真ん中にいつもいる黒木メイサ扮する美少女エミが病気になるという設定、さらに小学生時代の秘密基地構想(?)も、全く同じ。

小学生時代は、誰でも心の中に夢の世界をもっている(?)から、秘密基地で友達と過ごす遊びは最高に楽しいはず。そんな秘密基地が、『同じ月を見ている』では悲惨な結果になってしまった(『シネマルーム9』179頁参照)が、『そのときは彼によろしく』では、3人が大きくなった後もずっと思い出の基地として、ほぼそのままに……。

さらに、『同じ月を見ている』では、朝鮮人差別に苦しむ陳冠^{エディソン・チャン}希扮するドンが、少年時代の最高の思い出としてこの秘密基地を絵に描いたが、それは『そのときは彼によろしく』でも、画家となった五十嵐佑司(塚本高史)が、やはり少年時代の秘密基地をはじめての個展の目玉作品として描いたのと全く同じ。このように良くも悪くも、『そのときは彼によろしく』を観るについては、『天国は待ってくれる』と『同じ月を見ている』と対比してみれば、一層面白いのでは……？

20歳直前の長澤まさみに拍手！

2000年に東宝シンデレラコンテストで、35153名の中から13歳という最年少でグランプリに選ばれたのが長澤まさみ。彼女はその後、営業順調で、ずっと「一

人勝ち」状態を続けている東宝の看板女優として順調に成長してきた。中でも輝いているのは、白血病のヒロインを演じた2004年のメガヒット作『世界の中心で、愛をさけぶ』で、この演技により彼女は日本アカデミー賞最優秀助演女優賞など映画賞を総ナメにしたもの。

もっとも、その後の『タッチ』（05年）や『ラフ』（06年）では、それなりの演技をしているものの、彼女の最大の持ち味であるプロポーションの美しさが際立ちすぎて、逆にイマイチ（『シネマルーム8』196頁、『シネマルーム12』192頁参照）だった……？ そして、その後の『涙そうそう』（06年）もまざまざという出来（『シネマルーム12』196頁参照）。しかして、この『そのときは彼によろしく』では、白血病だった『世界の中心で、愛をさけぶ』と同じく、眠ってしまったら2度と起きることができなくなるという難病と闘いつつ、死ぬ直前の短い時間を13年前の「プリズム仲間」智史と過ごしたいと願う複雑な役柄を見事に熱演した。

彼女の生年月日は、1987年6月3日。したがって、今年2007年6月3日に満20歳を迎えるから、『そのときは彼によろしく』は、彼女の十代最後の作品。そんな作品で、こんな複雑で難解な役を見事に演じ切った長澤まさみに拍手……。

アクアプランツショップとは？ 「トラッシュ」とは？

最近、カタカナ文字の新しい職業が次々と誕生しているから、団塊世代の私にはなかなかわかりにくい。しかして、医者の一息子ながら、父親が経営する遠山医院の跡を継がず、花梨との約束どおり、今アクアプランツショップ「トラッシュ」を細々と（？）経営しているのが智史。アクアプランツとは水草のこと。そして、智史の説明によると、水草にも爬虫類の名前と似たような（？）ワケのわからない長ったらしい種類のもがいっぱいあるみたい……？ また、50年間ずっと眠り続け、いつか芽が出てくるという「オニバス」もあるらしい……。そもそも、小学生の時から1人で水辺に行き、そんな水草を眺めて楽しんでたという智史少年はかなりケツタイな奴だが、そうだからこそ秘密基地で遊ぶ花梨や佑司と親友になることができたのだから、運・不運はまさに紙一重……？ 智史が今アクアプランツショップを経営しているのは、もちろん自分のやりたいこと

と合致しているわけだが、それ以上に花梨と交わした約束が大きな根拠……。さらに、店の名前が「トラッシュ」というのも、単なる思いつきではなく、秘密基地時代におけるある約束によって決められていたもの。その約束についてはあなた自身の目で確認してもらいたいが、この映画のストーリー構成上大切なのは、そんな少年時代、そして秘密基地時代の約束を今なおずっと引きずって生きている智史の人物像……。さて、あなたはそんな智史を『電車男』（05年）の主人公と同じようなダメ男と見る、それとも……？

新人監督が次々と……

最近では女流監督の活躍が著しいが、他方でブームとなっている（？）のが新人監督の誕生ラッシュ……。中でもフジテレビや日本テレビとの提携を大きな原動力として、ここ数年「一人勝ち」状態を続けている東宝は、次々と新人監督の登用が著しい。昔の「大手五社時代」には、大学の教授の講座制、教授制、すなわち教授が死なない限りは、助教授は教授になることができないシステムと同じように、監督が死なない限り、助監督は監督になることができなかったもの……？

それは少し極端な言い方だが、映画監督という称号にはそんな重みがあったもの。しかし最近、とりわけ21年ぶりに邦画の上映本数が洋画を上回った2006年には、400本を超える邦画が製作されたのだから、映画監督の数が増えたのも当然。したがって、テレビドラマの製作に関わった人たちが、次々と映画監督としてデビューしているのが最近の特徴。そして、この映画によって若干35歳で映画監督デビューとなった平川雄一郎もその1人。

どれがラスト……？ あなたも戸惑うのでは……？

そんな新人監督ながら、私はこの映画の出来をなかなかのものと評価しているし、正直言って、途中で涙を流したことも何度か……。もっとも、そんな新人監督だからこそ、どんなラストにするか、またラストにどんなクライマックスをもってくるかについて相当悩んだのでは、と思う面も……。

『天国は待ってくれる』は「聖三角形」がテーマだったから、映画の冒頭に大人になった3人の姿が登場したが、『そのときは彼によろしく』は、後半になる

まで佑司がなかなか登場しないのが1つの特徴……。また、ストーリーの途中から、あの長澤まさみ扮する花梨が何となく不健康そうというのがミエミエだし、医者である智史の父親はもちろん、智史以外の観客はすべて花梨が眠ってしまったら2度と起きることができなくなるという難病と闘っていることを知っているわけだから、そんな花梨にいつ、どんな形で死が訪れるのかが大きなテーマ。

もちろん、平川監督はそれをすべて計算しながら、どんなラストに、どんなクライマックスにしようかと構想していたはずだが、この映画では、その「ラスト」がやけに長いのがもう1つの特徴……。映画のタイトルとなっている、「そのときは彼によろしく」という名セリフがあるシーンで語られると、「いよいよこれでこの映画は終わり」とあなたも一瞬思うはずだが、さて……。難病モノ、泣きドラマの終わりのパターンは、ある程度決まっているはずと思うのだが……？

国仲涼子も、北川景子も今回は脇役で……

国仲涼子は、2001年のNHKの連続テレビ小説『ちゅらさん』のヒロイン恵里役で、一躍「癒し系アイドル」と呼ばれるようになった成長株。また北川景子は、『Dear Friends ディア フレンズ』（07年）ではじめて主役を張った期待の星。そんな2人の美人女優を、平川監督は長澤まさみの脇役としてうまく配置している。

国仲涼子扮する美咲は、智史を思いながらも、智史が大好きなのは花梨だということを知り、1人外国へお菓子づくりの修行の旅に出ていくことに……。他方、北川景子扮する葛城桃香は、佑司の恋人として映画の後半にやっと登場するが、それは佑司の交通事故を告げるという役割のみ……。もっともその後、こちらは奇蹟的な展開を見せて、それなりにストーリー形成に寄与するものの、この映画においては、彼女もあくまで脇役。そんな美人女優2人を長澤まさみの脇役として配置している東宝は、さすが台所事情が豊か……。？

2007(平成19)年4月25日記